

2027年国際園芸博覧会について

1 2027年国際園芸博覧会とは

2027年に旧上瀬谷通信施設で開催される、国際園芸博覧会は、本市で初めて開催される「万博」です。

【参考：日本で開催された万博（開催予定を含む）】

- ・大阪万博（1970年）
- ・つくば科学博（1985年）
- ・愛知万博（2005年）
- ・沖縄海洋博（1975年）
- ・大阪花の万博（1990年）★国際園芸博覧会
- ・大阪・関西万博（2025年開催予定）

横浜で初めて開催される本万博では、美しい花々や緑を楽しみ、自然の持つ魅力や機能の大切さに触れていただくとともに、最先端の園芸や農業、世界中の様々な食文化を体験できるなど、ワクワクするような魅力的なコンテンツをそろえていきます。

【2027年国際園芸博覧会の概要】

テーマ	幸せを創る明日の風景～Scenery of the Future for Happiness～
開催期間	2027年3月19日（金曜日）～9月26日（日曜日）
開催場所	旧上瀬谷通信施設（旭区・瀬谷区）
博覧会識別	A1（最上位）クラス AIPH（国際園芸家協会）からの承認（令和元年9月）と、BIE（博覧会国際事務局）からの認定（令和4年11月）を受け、万国博覧会、かつ、世界最上位クラスの国際園芸博覧会として、開催します。
参加者数	1,500万人（地域連携やICT活用などの多様な参加形態を含む）
博覧会区域	約100ha（内、会場区域80ha）
開催者	公益社団法人2027年国際園芸博覧会協会

2 公式ロゴマーク最優秀賞作品・正式略称・推進体制について

博覧会開催1500日前となった2月8日、2027年国際園芸博覧会協会から、公式ロゴマーク最優秀賞作品、正式略称、博覧会開催に向け加速化する活動を牽引していく推進体制が発表されました。

〈裏面あり〉

【公式ロゴマーク最優秀賞作品】

応募総数 1,204 作品。「デザイン審査」、「知的財産権関連調査」を通過した最終候補作品から、2月8日に開催された「選考委員会」にて、最優秀賞作品が決定しました。



公式ロゴマーク最優秀賞作品と受賞者

【博覧会の正式略称】

「**GREEN×EXPO 2027** (グリーンエクスポ ニーゼロニーナナ)」

略称の狙い

「GREEN」は、「植物」、「花」、「緑」を総称する言葉であり、「自然」、「環境」という意味を持ちます。そこに、国際的に共通する課題の解決に寄与する国際博覧会「EXPO」という語を掛け合わせることで、SDGs やGX (グリーントランスフォーメーション) の実現に貢献する博覧会として、これからの自然と人、社会の持続可能性を追求し、世界と共有する場であることを表現しました。

※GX…地球温暖化や環境破壊、気候変動などを引き起こす温室効果ガスの排出を削減し、環境改善と共に経済社会システムの改革を行う対策のこと。

【推進体制】

国際園芸博覧会を推進する専門家体制<GREEN×EXPO ラボ>のメンバーとして、以下の皆様が就任しました。

- チェアパーソン：涌井 史郎 (わくい しろう) 氏
- 事業運営チーフディレクター：若松 浩文 (わかまつ ひろふみ) 氏
- 農&園藝チーフコーディネーター：賀来 宏和 (かく ひろかず) 氏
- マスターアーキテクト：隈 研吾 (くま けんご) 氏



涌井史郎氏

また、クリエイターとして

- 蜷川 実花 (にながわ みか) 氏 の就任も合わせて発表されました。

3 今後の取組について

国際園芸博覧会の機運醸成に向けては、今後決定する公式ロゴマークや公式キャラクター等を活用しながら、わかりやすいパンフレット・リーフレットを作成し、博覧会の魅力を発信していきます。また、市民の皆様にご参加いただけるプログラムやイベントなどの検討も進めていきます。

2027年の開催に向けて、皆様と共に、横浜市全体で盛り上げていきたいと考えていますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

★博覧会の最新情報は、以下ホームページでご確認いただけます。

<https://expo2027yokohama.or.jp/>

担当：都市整備局国際園芸博覧会推進課 三浦、井上
連絡先：671-4627
業務メール：tb-engeihaku@city.yokohama.jp

2027年国際園芸博覧会 基本計画・概要版

花や緑との関わりを通じ、自然と共生した持続可能で幸福感が深まる社会の創造を提案、
横浜から明日に向けた友好と平和のメッセージを発信します。

開催趣旨・意義

国際園芸博覧会の趣旨

国際的な園芸・造園の振興や花と緑のあふれる暮らし、
地域・経済の創造や社会的な課題解決等への貢献

時代認識

地球環境の課題：地球温暖化、生物多様性の損失、自然災害、感染症、食料危機等

SDGsの達成に貢献し、その先の社会も見据えた日本モデルの提示
—実現に向けた取組の方向性—

Society5.0の展開

グリーンインフラの
実装

花き園芸文化の振興等を
通じた農業・農村の活性化

観光立国や
地方創生の推進

日本・横浜発の「グリーンシティ」の発信提示

都市生活が自然とともにある未来を市民・民間企業・行政が共に考え、行動を起こし、
アイデアを形にする取組を展開することにより、先導的な「グリーンシティ」を提示

花き園芸・造園・農の振興

花き園芸・造園・農
の発展に向けた
取組の加速化

日本の花き園芸
文化・造園文化の
再評価と発信

伝統的な
花き園芸・造園技術
の保全・継承

遺伝資源の保全

開催理念・テーマ

花や緑、農、食は、我々の命を支え、暮らしを支え、また、世代、民族を超えて人々に感動や笑顔をもたらしている。我々人類は、植物をはじめとした自然に生かされており、**生命の潮流と循環の中で生きていく**。世界が経済的な豊かさを主体とした対比的な充足から、**質的成熟社会への転換期**にある中で、2027年に開催される本博覧会は、改めて**植物の自然資本財としての多様な価値を再認識し、持続可能な未来と誰もが取り残されない社会の形成**に活用するとともに、自然との共生や時間・空間を含めたシェアがもたらす幸福感を、新たな明日の風景として可視化していくことを目指すものである。

テーマ **幸せを創る明日の風景**

~Scenery of the Future for Happiness~

サブテーマ

テーマ実現の切り口

自然との調和

緑や農による共存

新産業の創出

連携による解決

全体概要

名称 : 2027年国際園芸博覧会
(International Horticultural Expo 2027, Yokohama, Japan)
博覧会種別 : A1 (最上位) クラス (AIPH承認+ BIE認定)
開催場所 : 旧上瀬谷通信施設 (神奈川県横浜市)
開催期間 : 2027年3月19日 (金曜日) ~ 9月26日 (日曜日)
博覧会区域 : 約100ha (内、会場区域80ha)
参加者数 : 1,500万人 (地域連携やICT活用などの多様な参加形態を含む)
(有料来場者数 1,000万人以上)

<資金計画>

会場建設費 320億円
(財源: 国、地方公共団体、民間による負担)
運営費 360億円
(財源: 入場料、営業権利金等)



横浜市・旧上瀬谷通信施設について

横浜市は、1859年に国際港として開港以降、園芸植物の玄関口となり、ユリを代表として数々の植物が海外へ輸出されるとともに、バラやチューリップなどの西洋の花の輸入の先駆けとなるなど、日本の花き貿易の先進地となり、我が国の優れた植物や園芸文化を発信し続けてきました。

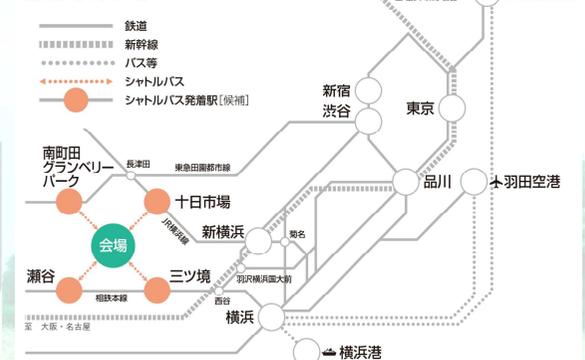
会場は横浜市の郊外部 (旭区・瀬谷区) に位置する旧上瀬谷通信施設であり、2015年に米軍から返還された約242haの広大な土地で、そのうち約100haが博覧会区域となります。長年にわたり土地利用が制限されてきたことから、農地や緩やかな起伏の草地など豊かな自然環境が広がり、南北に流れる相沢川、和泉川の源流部、谷戸地形等の貴重な自然資本が残っています。



輸送アクセス

- ・周辺各駅からのシャトルバスによる輸送
- ・空港や主要ターミナル発着場からの直行バス
- ・会場外駐車場を確保
「パーク&ライド」

会場までのアクセス



スケジュール

2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028

・ BIE認定、基本計画策定

・ チケットプロモーション

・ 参加国招請開始

・ 会場整備着工

・ 開催

幸せを創る明日の風景

～Scenery of the Future for Happiness～

花 緑 農 食 大地 交流

幸福感につながる人と植物のこれからの関わり方を示し、自然共生社会の実現に向けた新たな暮らしのモデルを提案します。

多様な主体が創りあげる圧倒的な花と緑

主催者庭園

主催者による国際園芸博覧会のシンボルとなるガーデン。季節ごとに咲き誇る花の変化が楽しめる。横浜の歴史・文化も演出

屋外出展

公式参加者（国や国際機関）や一般参加者が出展する庭園等。世界各国の多様な花き・園芸、造園技術や地域ごとの特色ある出展を体験

屋内出展

生産品や屋内庭園、フラワーアレンジメント、生け花、盆栽等の展示

日本政府出展

日本が誇る文化や伝統とともに、今後の花と緑、農の在り方のほか、最先端の造園・緑化技術や農業技術等を世界に発信

多くの人々を惹きつける圧倒的で魅力的な空間を創出

主催者によるシンボル展示

来場者が“自分にとっての自然とのつながり方”を発見する展示体験を創出。バイオフィリア*の考えのもと、リアルとデジタルの融合で、主として日本の植物資源の展示を展開する。

※人間が自然と交わりたいと望む本能的な欲求

技術の向上、産業の発展を促すコンペティション

- ・ 庭園及び花き等のコンペティションに加え、本博覧会独自企画のコンペティションを実施
- ・ 需要拡大・輸出拡大等による我が国の花き園芸・造園産業の発展を目指すとともに、多様な産業界が連携する枠組等も検討



自然環境を生かした会場

- ・ 自然環境ポテンシャルを取り入れた会場
- ・ あらゆる主体がつながり、将来につながる会場
- ・ 誰もが使いやすい会場

これからの時代にふさわしい会場運営

- ・ 持続可能性に配慮した運営
- ・ 安全・快適の達成と感染症対策の徹底
- ・ ユニバーサルサービスの提供
- ・ ICTの積極活用



2023年1月現在 会場イメージ 今後の調整状況により変更になる可能性がある。

産学官・市民の連携

Village

博覧会協会が設定するテーマに応じ、民間企業、教育・研究機関、市民等が共創してコンテンツを提供



Farm to Table STREET

気軽に旅をするように、世界中の風景・食・文化、人とのふれあいを五感で楽しむ食体験事業



Park Pavilion

本博覧会の趣旨に賛同する企業のビジョンを特徴ある魅力を備えた庭園とともに表現、新しい風景づくりを企業と実施

コモンズを中心に展開する多彩な行事

催事施設で行う開会式・閉会式・ナショナルデー・スペシャルデーをはじめ、会場内に複数配置した参加型交流拠点「コモンズ」における主催者や企業・自治体・市民団体等の多様な主体の催事により、参加者に楽しさや驚き、感動を与え、本博覧会のテーマを効果的に発信



グリーンインフラの実装

緑陰や風の道の形成、園路広場における滞留・蒸散作用、豊かな緑量の確保と緑のネットワークを形成



参加と連携を促すコミュニケーション活動

開催前から、企業・団体・行政機関・市民等との連携を推進するコミュニケーション活動、SDGsの行動促進を目的とした教育活動等を展開

本博覧会のテーマ、活動の継承

会場の一部は公園として整備され、本博覧会の理念・テーマ等を継承・発展・発信する拠点となる。『「みどり」で広がる暮らしの風景』をテーマに、多様な主体（利用者）の参画と連携により、自然と人をつなげ自然とともに生きる持続可能で多様なライフスタイルを醸成

